

# 1 海洋環境変動調査

藤原大吾

## 目的

本県沖合の魚群の回遊状況の推定、漁場形成の予測に必要な海洋環境の調査等を行う。

## 方法

試験船第一鳥取丸（199 トン）を使用して、本県沖合に設定した沿二-2 線（図 1）で 2, 8, 10 及び 12 月に、沖合-2 線（図 2）で 9 月と 11 月に海洋観測を実施した。稚沿岸二-2 線（図 3）で 4 月と 5 月に、稚沖合二-2 線（図 4）で 3 月と 6 月に海洋観測とノルパックネットを用いた水深 150m 深から（150m 以浅の場合は海底直上から）の鉛直曳きによる卵・稚仔の採集を行った。す-1 線（図 5）で 7 月に海洋観測とスルメイカ釣獲試験を行った。

海洋観測は CTD（COMPACT-CTD STD-1050, JFE アドバンテック社製）を使用し、全点で表面から 500m まで（500m 以浅の場合は海底直上まで）の水温・塩分を測定し、さらに水深 1,000m を超える 1 点で 1,000m まで測定した。ただし、表面水温は棒状水温計により計測した。塩分については、全点で表層をバケツ採水し、その試料を持ち帰り、サリノメータ（ギルドライン Autosal8400B）で検定した。

## 結果

定線観測は、天候の影響により、一部観測を実施できなかった定点があったが、概ね計画どおり実施した。

定線観測の代表点（観測点：36.00' N, 133.40' E）による表面から水深 100m 深までの月別水温変化を調べた。また、栽培漁業センターヒラメ親魚池の午前 9 時の水温を毎日計測した。定線観測の代表点による表面から水深 100m 深までの月別水温変化及び栽培漁業センターヒラメ親魚池での水温定置観測結果を図 6 及び図 7 に示した。

隠岐諸島周辺海域での本年の海況は以下のとおりであった。沿岸の表面水温は、春季は平年並から平年より高めに推移し、夏季から秋季にかけては平年より低めで推移、11 月以降は平年並から平年より高めで推移した。50m 深水温は、年間を通して平年並から平年より高めで推移した。100m 深

水温は、4 月から 9 月にかけては平年より高めに推移し、10 月は兵庫沖の冷水塊が沿岸部に沿って西進したことにより平年より低めの値となった。11 月は沿岸部で暖水域が発達したため平年より高めに転じ、12 月は平年並の値となった。

今年は島根沖の冷水域の張り出しは、夏季から秋季にかけて規模はやや大きく接岸で経過し、山陰若狭沖冷水の張り出しは周年に渡り規模・接岸状況とも平年並で経過した。

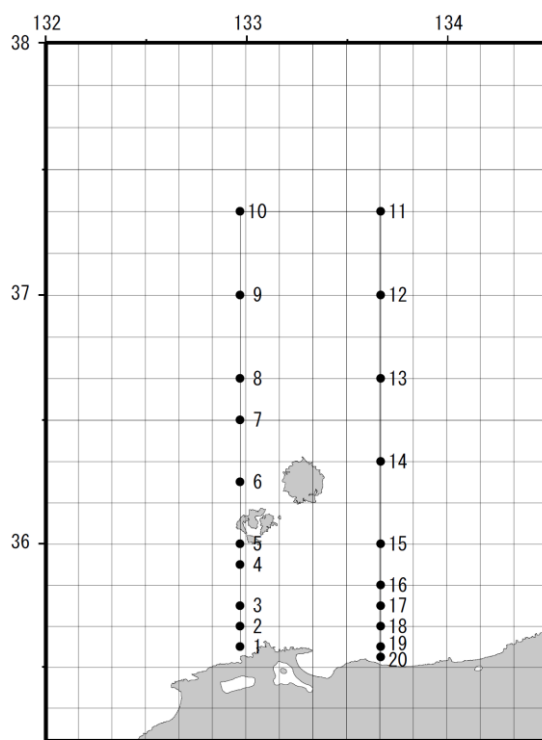


図1 沿岸観測定線（沿二-2）

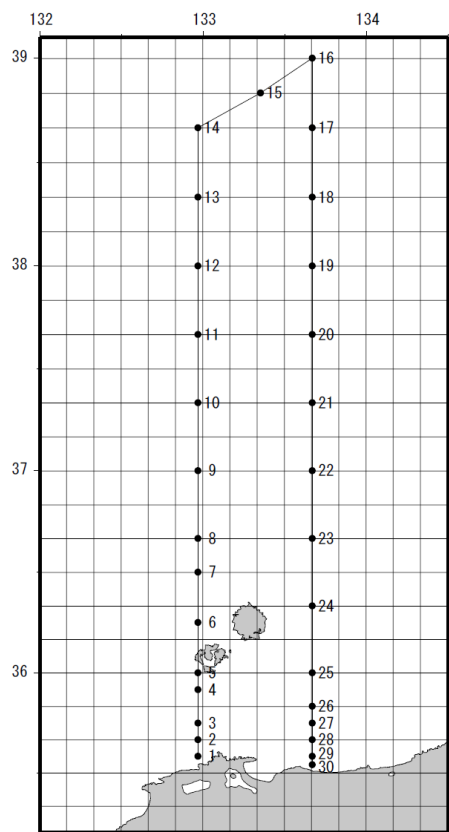


図2 沖合海洋観測定線（沖合一2）

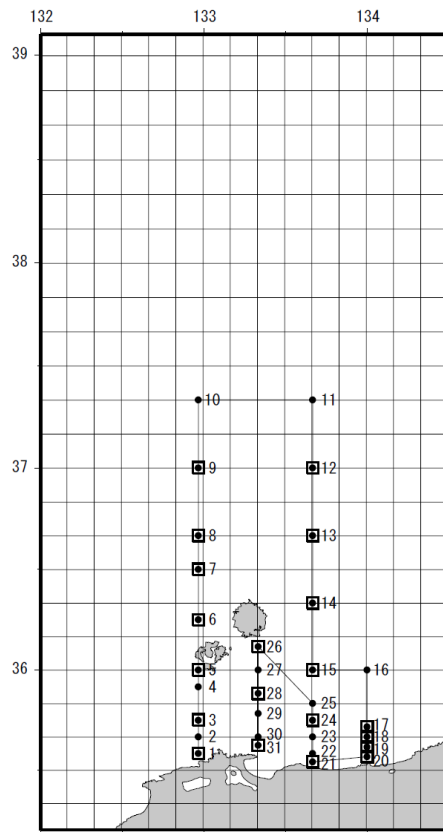


図3 沿岸稚魚調査定線（稚沿岸二一2）

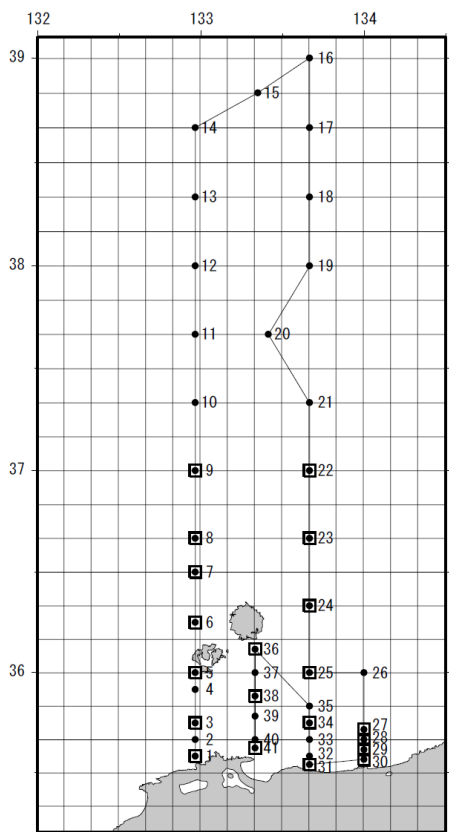


図4 沖合稚魚定線（稚沖合二一2）

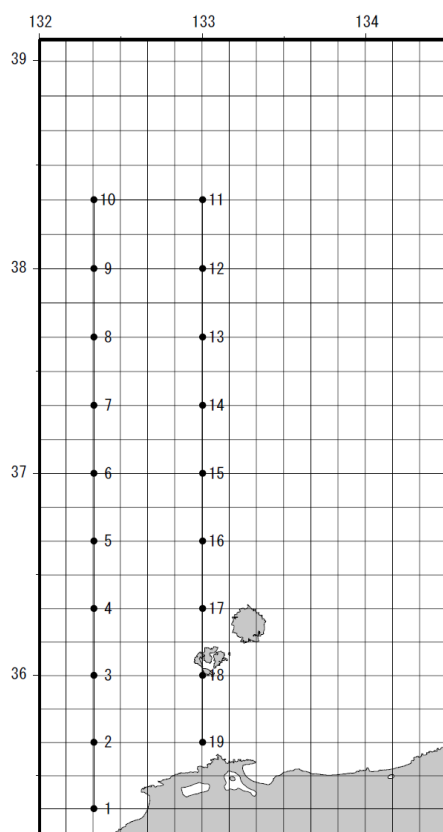


図5 スルメイカ漁場一斉調査定線（す一1）

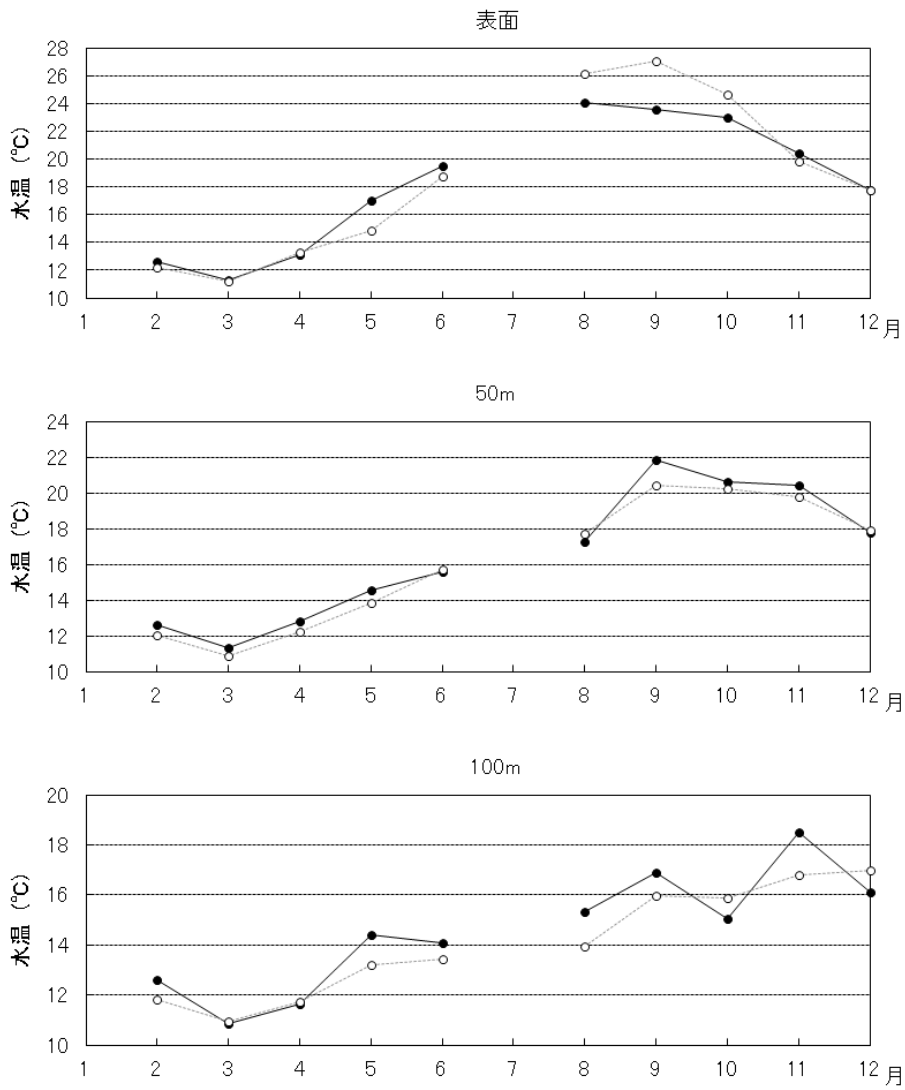


図6 定線観測による赤碕沖の月水温変化

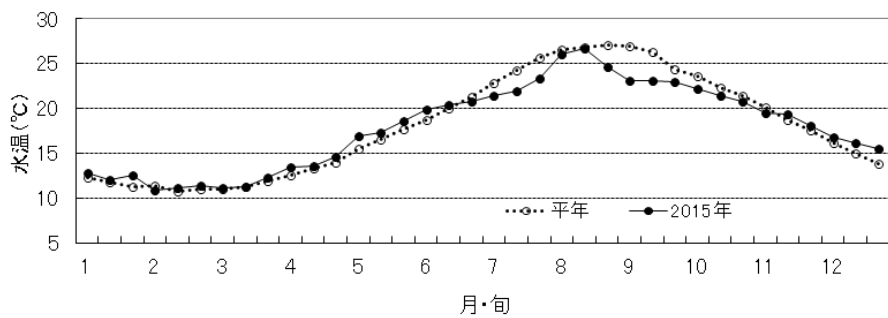


図7 栽培漁業センターヒラメ親魚池の旬平均水温の変化